第一席

伝統文化に浸るひと時

藤枝明誠高等学校一年（静岡県）
池谷　杏奈

私は小学四年生から茶道を始めました。お茶とお菓子をいただけることから「茶道クラブ」に入ったことがきっかけです。美しいお茶室でのお稽古にワクワクしていました。高校生となった今は茶道部に所属し、ますます茶道の奥深い魅力に惹かれています。気づけば私の学校生活は茶道とともに続いています。

新茶を楽しむ季節でもある六月、学校では「青藍祭」として文化祭を開催します。そこで茶道部はお茶会を開きます。年に一度、日頃のお稽古の成果を発揮する場であり、また先輩方の集大成となるお点前をする拝見する機会でもあります。お茶会を目標にお稽古には熱が入り、さらに華道や着付けのご指導も加わって活気づきます。中高一貫校であるため、私にとってこのお茶会は例年の季節行事として馴染んだものとなっていました。

しかし、コロナ禍という世界を巻き込む嵐がこの流れを遮ってしまいました。そして感染対策のため、お茶会は中止となりました。通常の茶道部の活動にも制限がかかり、そのまま時が流れていきます。正解を模索しながら暗いトンネルを進んでいくようだと感じていました。

そんな中、茶道の先生から

「これまでのお稽古を忘れないように、そして日常にこそ礼儀を」と、ご指導いただきました。私は生活に少しずつ迫る不安とストレスを感じていました。知らないうちに雲に覆われていたようだったと思います。そこに一筋の光がさすような言葉でした。

それは茶道の心を表す「和敬清寂」であると思い起こしました。互いに相手を思いやり、敬い、大切にすること。身も心も清潔であること。そしてどんな時にも動じない、いつも通りにいられる心がけが大切だということです。茶道の心得である言葉は、私にかかっていた雲を少しずつ取り除くきっかけとなりました。「有事」と呼ばれる今の状況で、どのような心持でいるかというのはとても大切です。

私はこれまでお稽古をしてきた茶道に改めて立ち返りました。茶道は相手を思いやる心を育て、自分の心を見つめる「道」であるとありました。茶道部で学んだことはたくさんあります。美しい姿勢、お辞儀の仕方や種類の他、お点前の細かな動作一つ一つに意味がある事などです。どれも相手を敬うからこそだと思いました。これからは相手を

思いやる心を伝える動作ができるようお稽古を重ねたいと思います。さらに、日本文化ならではの繊細な心を養いたいです。四季と節句に合わせたお花やお菓子に、いつも心が癒されます。先生のご説明を聞きながら、固有の日本文化に触れていることを実感します。茶道の持つ長い歴史を思うと、このコロナ禍の有事も必ず終わるだろうと想像できます。茶道を学ぶことで、自分の心をみつめ、寂の心が備わるようこの伝統文化の道を精進していきたいです。